内綿作の研究成果と他地域との比較，②各綿作地域における農法及び生産力的側面の解明，③各地域における綿作の発展・衰退の究明，④農業体系の中での綿作の把握，の4点を指摘している。

先行研究における研究動向の把握は，多くの場合にはその研究対象とする研究事象を中心に整理されがちである。とりわけ，その研究蓄積が多い綿作に関する研究にあっては，多くの研究時間を割かれることになろう。しかし，著者があとがきで「毎週『地域論』をテーマとした勉強会を行った」と述べているように，本研究のいわゆる本質理論は地域論に立脚していると思われ，歴史地理学における地域論の研究動向に関して，何らかの形で触れても良かったのではなかろうか。

さて，第一章と第二章における研究視角の提示と研究史の整理を踏まえ，第三章では研究の意義と特色を述べている。本研究の特色としては，①東海地域の綿作を他地域と比較しつつ究明すること，②商品生産のあり方を空間的（面的）な広がりを意識して追求すること，③地域固有の条件との関わりに重点をおくこと，そして④地域スケールを郡域から旧国域を基本とすること，の4つの点があげられている。これらの特色は，地理学ないしは歴史地理学の本質的な研究視角であり，歴史学の研究視角との相異を意識したものと考えられる。

第四章以降は，具体的な調査に基づく研究成果である。

第四章では，『全国農産表』を資料として，研究対象地域である東海地域の綿作に関する全国的位置を把握している。

第五章においては，東海地域の自然的条件を全国的な中で位置づけるとともに，西三河及び尾張地域の綿作について主として自然条件から検討している。そして，洪積台地の畑地開発や干拓地の新田開発との関連を明らかにし，両地域の政治的支配との関連に関しても言及している。

次の第六章では，東海地域，殊に三河地域・尾張北西部・知多地域・伊勢地域の綿作を概観している。

第七章では，西三河地域・尾張地域・伊勢地域の綿作を具体的な現地調査に基づく資料により，詳細に検討している。西三河地域については，田方綿作・自然堤防地帯の畑方綿作・洪積台地上の畑方綿作・海岸部の新田砂畑綿作の4つに地域類型を行っている。さらに綿作経営に関しても，稲綿輪換綿作・綿と雑穀との輪作・連年綿作の3つの類型が存在したことを明らかにしている。また生産性も，摂津や河内地域とほぼ同程度であったとしている。

次に尾張地域に関して言及し，自然堤防地帯での綿作の卓越，畿内地域と同等の経営規模，尾張北部地域における綿織物業地帯と綿作地帯との地域的分化などの諸点を明確にしている。

最後に伊勢地域の綿作について検討し，中部から南部地域の自然堤防上での綿作の卓越していたこと，尾西地域や西三河地域と同程度の経営規模であったこと，干鰯の投入があるものの収量は畿内地域の収量以下であることなどを明らかにしている。

第八章においては，三河及び尾張地域の木綿流通の地域的特色を検討している。三河地域の木綿流通においては，所領錯綜地域であるがために江戸の木綿問屋の支配が浸透していたことを踏まえ，木綿流通の担い手が仲買商・買次問屋・積問屋の三者からなり，買次問屋が中核的役割を果たしていたことを究明している。さらに，これらの商人の地域的分布を検討し，街道や河口など交通の利便性との関連について言及している。

尾張地域の木綿流通については，当該地域が一円支配地域であったことを踏まえつつ，地方的特産品としての性格，領国内の諸市場における取り引き，定期市との関連，知多半島地域の特異性，木綿種の地域的差異の諸点から言及している。

そして，最後の第九章では，以上の各章で明らかになった諸点のまとめとなっている。

以上のように，本書は詳細な現地調査に基づく重厚な研究成果である。しかし，伊勢地域における木綿流通に関しても検討がなされていれば，なお一層３つの地域比較が明瞭になったと考えられる。

（古田悦造）

松田松男著：

『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』

古今書院　1999年2月

A5版　316ページ　本体9,200円

本書は，戦後農村の変貌について，高度経済成長期における労働市場の変貌，とりわけ酒造出稼ぎに焦点をおいて研究を進めてこられた著者の近著である。一方で，わが国の伝統工業である酒造業に対してその労働力のあり方からの研究ともい

える書である。その意味でもわが国における酒造出稼ぎと酒造業について精緻な実態調査に基づいた分析が行われている。本書の研究課題は「戦後日本における農家出稼ぎの変貌，とくに酒造出稼ぎをめぐる地理学的研究」(p1)であり，戦後高度経済成長期における「村落社会の変貌」(p2)現象としての杜氏村の変貌にその焦点があてられている。そのために「供給側の研究の精緻化を試み，杜氏・蔵人と需要側の酒造業との間を労働市場論的に結びつけ」(p3)ることが目的である。

内容は大きく序章，第Ⅰ部労働市場の階層性および歴史的考察，第Ⅱ部酒造出稼ぎと酒造業の動向，第Ⅲ部営農指向型杜氏維持村，第Ⅳ部兼業型杜氏減少村，第Ⅴ部杜氏の衰退化と建設労働，終章に分けられ全13章のほかに，あとがき，参考文献，索引で構成されている。地理学分野でこれほど多様に酒造出稼ぎと酒造業を扱ったものは近年では希有である。以下各部についてその概要を紹介する。

序章は，問題の所在と研究方法および研究動向の提示である。ここで酒造出稼ぎ研究の意義を「将来，第三世界の季節出稼ぎ研究の出発点となる」ことと「わが国の地理学に，地域労働市場の研究視点を導入する」ことにおいている。このことによって中国における民工潮の研究や工業の地域構造の解明をも視野に入れることができると指摘している。

第Ⅰ部では労働市場の概念の吟味と既往の研究史の整理から，杜氏集団・地域の類型化の前提となる酒造出稼ぎと酒造業の生成，展開が歴史的文脈から描かれている。とくに出稼ぎ概念が詳細に検討，整理される。

第Ⅱ部では酒造出稼ぎ先である酒造業の展開とその中での酒造出稼ぎの変化が整理されている。まず，酒造出稼ぎの分布とその変化，そしてその要因が分析される。つぎに酒造業の動向，清酒の生産・消費構造の地域的構成とその変化について，全国的な動向を概観した後，神奈川県の酒造業を事例に現代酒造業の問題が明らかにされている。

以上の整理によって析出された南部杜氏村，越後杜氏村，丹波杜氏村などの営農指向型杜氏維持村が第Ⅳ部で，信州富士見・小谷杜氏村，丹後杜氏，志太杜氏村などの兼業型杜氏減少村が第Ⅴ部でそれぞれ分析される。圧巻はこの部分である。杜氏集団を輩出した母村の構造とその変化が，詳細な実態調査によって明らかにされているのである。形式的に分類すればこの部分は農業地理学的な手法によって分析がなされている。たとえば，実地調査による漆立集落の農家構成(p119)，芝の又集落の農家構成(p139)，尾神集落の農家構成(p141)，東田中集落の農家構成(p143)，不動沢集落の農家構成(pp146-147)，浦集落の農家構成(p149)，荒谷集落の農家構成(pp152-153)など集落戸表の作成や，農林業センサスや農業集落カードを利用した字別の経営形態の整理である。同時に詳細なアンケート調査が関係各層を対象に行われている。このような詳細な農業集落の分析によって杜氏集団の集落内での位置づけが行われ，酒造以外の農閑期における農村経済とその構造が描かれている。最後に，杜氏集団の将来展望が山内杜氏村および松代町を事例に，母村の労働市場の変貌とりわけ建設労働との関わりで行われている。

終章では全体のまとめが行われている。そのなかで残された課題としてあげられているのは西南日本における杜氏集団の分析である。確かに清酒杜氏が基本的に従来の農業地域区分上に定置される場合，西南日本型の農村における杜氏集団の生成と変化については重要である。また，酒造出稼ぎおよび酒造業全体を捉えるうえで，南九州を中心とした焼酎杜氏および本格焼酎業の分析も欠かすこともできないであろう。一方，杜氏集団の将来展望について，そのものづくりの感性が，杜氏やその他蔵人の農業的な感性から，職人的な感性へと変化しつつある現代の酒造りに言及されている。これらの点への著者の指摘は，酒造出稼ぎや酒造りだけでなく伝統工業の展望についても示唆に富むものといえる。

本書は，著者も指摘しているように日本における伝統的な労働市場および産業を対象にしているが，成長を続ける東アジアの地域にとって在来の諸構造の存立を考える上で貴重な書といえよう。その意味でも，書末の参考文献，索引は，酒造出稼ぎや酒造業に関する研究を志すものにとって誠に参考になるものである。

（八久保　厚志）